
ある2人の物語

AKIRA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある2人の物語

【ΖΖΓード】

Ζ5083B

【作者名】

AKIRA

【あらすじ】

ある頭のいい女子高生とその彼氏のナレーターの頭しかない男子高校生のお話。

(前書き)

一応恋愛小説として書きましたが、上手く書くことが出来ませんでした。
した。

ある大学の合否の結果が書いてある掲示板の前。

「あつ！あつた！」

一人の女性が大きな声で叫んだ。

彼女は隣にいる男性に抱きつきながら聞いた。

「ねえ？登は？」

その問いに女性の方に向いた登と呼ばれた男性が言った。

「……ない」

「え？……」

「……だから、……ない」

一人の間に流れる沈黙は、周りの歓喜や悲鳴をどんどん包み込むように一人の耳から消えていった。

二人は同じ高校に通う幼馴染のカップル。

女性の名はあさ美。あさ美と登は一緒に大学に行こうと、いつも二人で勉強をしていた。あさ美の方は学歴優秀で、大学合格は樂々だと言っていた。一方登の方は悪いと言うほどではないが、大学合格は難しいと言っていた。

「…………で、こうなる訳。解った？」

あさ美が言うと片手で頭を搔いている登が言つ。

「お、おう・・・」

「ホントに？」

「……すいません。解りません」

「……」

『スパーク！？』

あさ美はノートを丸め、登の頭を思い切り叩いた。

「痛！ だって解らないんだから仕方ないだろ？！」

「そんな事言つてないで少しは理解しようとしたよ」

「うつ…、すいません」

「じゃあもう一度行くよ？」

こんな感じで何時も一人は勉強をしていた。

そんな日々が続くある日。教室にいたあさ美は先生に呼ばれた。

「先生、なんですか？」

「渡辺、この頃成績が落ちてるみたいだがどうしたんだ？」

呼び出されるとは思っていた。先のテストでいつも10番以内にいたあさ美は、20番台にまで落ちてしまったのだ。

「すいません。少し疲れていたので」

「そうか。悪気は無いのだが少し聞いたんだが、いつも山本と勉強してるんだってな。どうだ？お前は十分出来たのか？」

「それは…」

それを言われて言葉が詰まった。確かにあさ美は登に教えていて十分に勉強をしたとは言えないかもしれない。登はいつも50番台にいてあまり先生からは期待されていなかった。先生はあさ美が言葉を返す前に言った。

「どうだ？受験が終わるまで距離を置くのは」

「え？ なんでですか？」

「お互いの為にも一旦距離を置いて、山本も自分にあった未来が見えてくるかもしれないじゃないか？お前も自分のためにいいと思うんだが」

それを聞いたあさ美はカチンと来た。

「先生にそんな事言つ資格は無いと思いますが」

「いや、だがなあ…」

「だがもだつてもありません！失礼します！」

「お、おい渡な…」

言い終わる前にあさ美はドアを閉め出て行った。

今日もいつものようにあさ美の部屋で勉強会を始めた。あさ美は前髪が邪魔なのでヘアピンをつけていると、前にいる登が勉強を始めるのを見て手を止めて話し掛けた。

「登、どうかしたの？」

下を向いていた登はあさ美の方に目線を向け、言った。

「もう勉強会辞めようか…」

「え？ どうして？」

思いがけない言葉にあさ美はビックリした。

「ここの前のテスト、あさ美が悪かったのって俺のせいだと思つて… そしてまた下につつむく登を見て、すぐさま言い返した。

「別に違つよ。あの時はちょうど調子悪かつたからだつて…」

「今日お前が先生に呼ばれたの知つてるんだ。悪いとは思つたけど、後つけて話してるの聞いちゃつたんだよ」

「そう… なんだ。でもちゃんとあれは違うって言つた…」

「だから、俺のせいでお前に迷惑掛けたくないんだよ！」

テーブルに手を強く突いた登。しばらくして我に帰つた登は、荷物をまとめ、

「ゴメン。今日はかかるわ…」

「ちょっと登…」

その言葉に応じることなく、力なくドアを閉め出て行く登。残されたあさ美はテーブルに顔を伏せて泣いていた。

センター試験まで約1ヶ月。

その後、今までの間、登とあさ美はほとんど話す事は無かつた。そんな事があり、あさ美は勉強に身が入らず、授業中も上の空、と言つた状況だった。

(「どうしよう…。」) こんな事で登と別れたくない…)

やつと思つたあさ美はある行動に移つた。

『パンローン』

「ここは登の家。チャイムが鳴り出でてきたのは登本人だった。
玄関にはあさ美が立っていた。

「あ、あさ美…。どうしたんだ? 急に家なんか来て。勉強はどうしたんだ?」

「それより、これ」

差し出した手には小さな紙袋が。その中には、

「お守り?」

「やうだよ。私とおそれの」

もう一方の手を出すと袋の中のお守りと色違このお守りが握られていた。

「嬉しいけど、どうしたんだよ。そんな事してたら勉強できなくな
るだろ!」

「繫がりが欲しかったから…」

「え?」

「あれからずっと離れ離れで寂しかった。だから…今まで通りでも
いいけど、何かで登と繫がつていたかった。だから…」

「…あさ美」

次の瞬間、登はあさ美に抱きついた。

「キヤー…どうしたの? 急に」

「俺も…、俺もあさ美がいなくちゃダメだ。勉強してもすぐあさ
美の事考えちゃって。全然身が入らなかつたんだ」

そしてお互いの気持ちを確かめ合つようになり無言で抱きしめあつ。

「あとちょっとだけ、また勉強会はじめようか」

「ああ。良くわかんないところがたくさんあるんだ」

「もう、何回言わせるのよ。少しば解ろうと努力しなきよ」

「すいません」

しばらく笑いあつた後、二人は登の家で勉強を始めた。

～Hピローグ～

あさ美は希望していた大学に無事入学する事が出来た。一方登は、あの合格発表の時に周りを良く見てみると『補欠合格欄』というところに番号があり、その後欠員が出た為、登は入学をする事が出来た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5083b/>

ある2人の物語

2010年10月8日15時14分発行